

二輪ギク電照栽培での高品質化技術

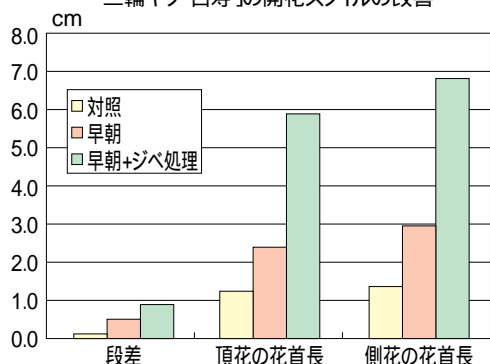
1. 二輪ギクの開花スタイル

新庄町・当麻町は二輪ギクの生産が多く、全国有数の産地です。しかし出荷は6月上旬～10月上旬が主で、出荷期の拡大が市場から望まれています。二輪ギクは、側花が頂花の上2～3cmの位置で段差をもって咲くのが良いのですが、電照抑制栽培ではこの段差がなくなり二輪が並んで咲いてしまいます（写真の対照区）。そこでこの対策技術として当センターで検討した方法をご紹介します。

2. 早朝電照の効果

早朝電照とは、花芽分化を制御するための電照（深夜）を打切った後、引き続いて夜明け前1～2時間の電照を行う方法です。スプレーギクの花房を整える目的で実用化されています。二輪ギクでも有効で、花首が長く、段差も大きくなります。「葛城の舞」や「京舞」といった品種では、これだけで2cm程度の段差を確保できます。さらに、花の直下数枚の葉も大型化する効果があるため、茎が先細りする「うらごけ」現象を回避することもできます。

二輪ギク「白寿」の開花スタイルの改善

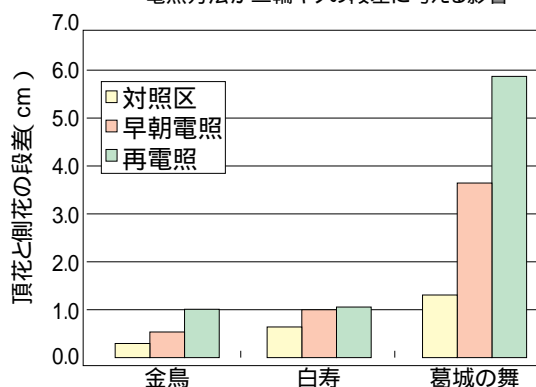


3. ジベレリンの散布処理

早朝電照だけで不十分な品種に対しては、さらにジベレリン処理（20ppm散布）を行うと有効です。段差も大きくなり「より美しく」咲かせることが可能です。時期は蕾が1cm程度になる花首伸長開始期が効果的です。「白寿」という品種では、早朝電照とジベレリン処理の組合せによって、開花スタイルが更に良くなります。

しかし、この方法でも頂花と側花の両方が伸びるため、段差はわずか数ミリ広がるだけです。そのため、これでも不十分な品種がいくつかあります。

電照方法が二輪ギクの段差に与える影響



4. 再電照の可能性と今後

再電照とは花芽分化を制御する電照（深夜）を打切った後、数日あけて再度、電照（深夜）を行う方法で、一輪ギクの花を大きくするのに使われています。通常、頂花と側花では頂花の方が先に花芽分化・発達します。そこで二輪ギクでは頂花の花芽形成が確定し、側花の花芽分化が確定していない時期を狙って再電照を行うことで、側花の花首だけを伸ばすことが可能と考えられます。今年度の結果では、早朝電照で効果が不十分な品種（「金鳥」など）に対しても再電照が有効でした（写真の再電照区）。今後、各品種に応じた再電照開始時期と期間を調査し、現地との連携で実用化を図りたいと思います。

（花き栽培チーム 仲 照史）



各処理が開花スタイルに与える影響（品種：金鳥）
左から早朝電照+ジベレリン処理区、対照区、再電照（7日後7日間）区